

Shiga・Hikone



Hanashobu-dori



SERITAWA NO KAPPA

SERITAWA NO KAPPA



特定非営利活動法人 芹川の河童

Tokutei Hiei-ri Katsudou Houjin Serikawa no Kappa

日本財団・こども第三の居場所

循環型未来食堂

みんなの食堂

Nihon Zaidan・Kodomo Dai-san no Ibasho

滋賀県ヤングケアラー支援体制

構築モデル事業

ヤングケアラー支援事業

Young Carer Shien Taisei Kouchiku Model Jigy・Young Carer Shien Jigy



令和5年度 活動実績報告書

Supported by

THE NIPPON
FOUNDATION

もくじ

発刊によせて	01
あしたのまち・くらしづくり活動賞 振興奨励賞を受賞しました	02
食でつながる地域の居場所「みんなの食堂」	03
日本財団・こども第三の居場所「みんなの食堂」	13
日本財団・こども第三の居場所「みんなの食堂」モリウミアス編	21
令和5年度 滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業	28
誰にも会いたくないカフェ 通信サロン	33
誰にも会いたくない夜	38
若者の就労を支える支援一相談事業	39
障がい児者計画相談支援事業	40
まとめ	41
資料編	42





特定非営利活動法人芹川の河童
理事長 **上田 健一郎**

昨年(2023年)の経済社会情勢は、内外ともに不透明さと緊迫の度が増した1年でした。世界では、ロシアによるウクライナ侵攻の長期化に加え、中台間の緊張、イスラエルとパレスチナ武装勢力間の衝突など、地政学リスクが増大しました。国内ではアフターコロナで緩やかに景気が回復するものの、歴史的水準に達した言われている円安や消費者物価の上昇・エネルギー価格の高騰の影響、深刻さを増す人手不足など、依然として厳しい状況にあります。このようなことを鑑みますと、2024年も先行き不透明な状況が続くことは、ある程度覚悟しなければならないと思います。

そのようななか、家族や家庭が抱える問題も複雑化しまた深刻化しているのに加え、地域のつながりが希薄になり、安心して過ごせる子どもの居場所が少ないという大きな課題が続いています。このような社会課題に取り組みながら、「食」を通じて誰もが居場所にできる場所を地域循環型でつくりたいと循環型未来食堂「みんなの食堂」の活動を継続しております。

これからも、食べるのもよし、提供するのもよし、それが地域を元気にするをモットーに福祉には見えない“支援の輪”を広げてまいりますので、引き続きのご支援をお願いいたします。

花しょうぶ通り商店街は平成9年振興組合設立から既に27年が経過いたしました。

花しょうぶ通り商店街の活動スローガンである「100の愚痴より10の提案10の提案より1の実行」を実践へ…今できる事をやる精神で一步でも前へ我慢と精進のフェーズです。

空き店舗が増える中、商店街に新たに店舗を構えるお店も芽生えておりお客様の夜の誘客等に寄与していただいています。

その中NPO法人芹川の河童さんが運営されている「みんなの食堂」は商店街の磁石となりまた地域の居場所づくりに貢献いただいております。不登校や引きこもりの若者向けの交流の「通信サロン」誰にも会いたくカフェを含め近年の生き辛い世の中に一筋の光を生む商店街の地域貢献事業として注目され高い評価を頂いています。誰ひとり取り残さない持続可能な社会を目指し、子どもから高齢者までが安心安全な暮らしをサポートできる商店街として一步一步ながら着実に前進しています。

今後も新たな取り組みをそれぞれ有機的に結び付けながら更なるシナジー効果による「ふるくてもあたらしい商店街」活性化に向けて努力を続けていく所存です。



花しょうぶ通り商店街振興組合
理事長 **和田 かずしげ**



特定非営利活動法人芹川の河童
代表 **川崎 敦子**

令和5年度に当法人が行った事業について、報告書を発刊させていただきます。

当法人の事業は、引きこもり・コミュニティカフェ・ヤングケアラーなど福祉制度の狭間の支援を中心としております。このような福祉の狭間の支援のことを重層的支援と言って行政でも取り組むようになりましたが、様々な問題が混在しているため他機関との連携が必要になります。福祉間の他分野もありますが、地域、商店街、企業などの他分野との連携も必要になります。

令和5年度は、連携をより意識して活動してきました。地域との連携を活動の中心に置いた当法人が、連携の中核を担えるようになることが求められていると思っています。



令和5年度 あしたのまち・くらしづくり活動賞 振興奨励賞を受賞しました。今回、これまで商店街と共同で地域の居場所事業に取り組んできた活動に対して、公益財団法人あしたの日本を創る協会より振興奨励賞を頂きました。11月3日(金)東京都新宿区の「ホテルグランドヒル市ヶ谷」にて開催された受賞式に参加して、表彰をお受けいたしました。

内閣総理大臣賞など素晴らしい賞を受けられた団体の方とも交流し、大いに刺激を頂きました。



福祉の居場所が、地域・商店街の活性化につながる ～支え支えられる地域共生社会の居場所の実践から～

地域の居場所である地域循環型未来食堂「みんなの食堂」を運営して3年が過ぎた。どこからも補助金を受けず独自に運営費を稼ぎ出すことを目指して開設した地域の居場所の取り組みを報告する。

自立型を目指したのは、理由がある。当法人はこれまで引きこもりや生きづらさを抱える若者の居場所「誰にも会いたくないカフェ」を運営してきた。何をしてもいい場所何をしなくてもいい場所であり、福祉に見えない居場所は「誰にも会いたくないカフェ」という名前も併せて、多くの方々に注目されてきた。居場所で会う若者の多くは、「助けてほしい」とは言わない。むしろ、社会の役に立ちたいと思っている。社会に役に立っている実感が持てる居場所は、今の福祉制度にはない。そこで思い立ったのが食堂という形態でどこからも補助金を受けずに運営することである。食事を提供するということは、自立できて家を出てくる目的があり福祉の場所に見えないからである。

地域の企業やフードバンクから、フードロスの食材を引き受ける。日替わりでお店を地域の人に貸し出す。お店の運営は、この貸し出し代で賄う。一日1メニュー、日替わり店長の食堂である。フードロスの食材を使っているの、食べるだけで社会の役に立つ。食べてくれる人がお店に協力してくださったら、循環が生まれる。ということで地域循環型未来食堂「みんなの食堂」と名付けた。

場所は、当法人の本拠地がある花しょうぶ通り商店街の空き家を活用。商店街は伝統的建造物群保存地区に指定されているため空き家を伝統的建造物群保存地域の補助金、加えて滋賀県にぎわいまちづくり総合支援事業費補助金を使い、商店街の主導で整備するという本来の福祉の整備ではない方法を使うことができた。

机、椅子、台所用品などの備品は、地元の方々や企業の寄付で賄う。本来の補助金を受けなくて整備することができた。とはいえ、地域に認知されるまで、日替わり店長は3名、開店日も週3日というロースターとを支えていただいたのは、「地域共生社会のわかりやすい形である」と評価していただいた福祉医療機構の助成金である。

開店して一か月で緊急事態宣言。食堂は、閉めることを決断。しかし、フードロスの食材は学校給食からも含めてひっきりなしに入ってくる。日替わり店長と無料のお弁当配布に踏み切った。市の教育委員会から家庭訪問の手土産に毎日5食、生活保護家庭に毎日3食、社会福祉協議会の配布弁当として20食、合計30食を毎日2か月半作り上げた。この取り組みには、緊急事態宣言で休まなければならない地域のお店料理人など多くの方がボランティアとして参加。この取り組みのおかげで多くの方に知られることとなり、現在は日替わり店長11組、かなりの日数を開店することができまでに成長。

3年間の運営の中で、引きこもりの人だけでなく人は誰でも役に立ちたいまたその役に立てる場所を探していること、いきなり専門機関や行政に相談することはできないが話せる場所を探していることが分かってきた。地域の居場所だからこそ、支え支えられる対等な関係を築け、福祉に見えないからこそ福祉の入り口になれることを知った。また、どこからも補助金を受けないことは利用制約もなく、福祉の困りごとをどんなことでも引き受けられることができる運営形態は、重層的支援に使えるのではないかと考えるようになったことから、日本財団のこども第三の居場所として食堂の営業終了後の場所の活用やヤングケアラー支援体制構築モデル事業にも活用してきた。まさに、福祉制度の狭間を埋める場所として発展をしてきた。

湯浅誠さんが食堂に来られた時、「地域の人がこれだけ居場所のことをわがこのように心配し関わっているところは見ることがない。これからの新しい福祉の在り方」と評していただいた。このご意見は逆に商店街の方からすると、福祉を真ん中に置いた商店街の活性化として発展できないかと地域で検討するようになる。

商店街には、当法人の居場所だけでなく高齢者の施設も開業。ますます福祉の居場所が増えている。地域共生社会の担い手として、福祉を中心とした地域の活性化を、全国に発信していくことができるよう取り組みを進めていきたいと考えている。

食でつながる地域の居場所 1年間の報告

地域の居場所である 地域循環型未来食堂「みんなの食堂」を、花しょうぶ通り商店街で開店して4年目になる。運営は自立までと少しというところではあるが、子育て支援やヤングケアラー支援をはじめとする福祉分野ではゆるく繋がることのできる居場所の必要性が認められる中、視察や講演依頼を多く受けてきた。

また、花しょうぶ通り商店街 街の駅に設置しているという点も注目していただくことがあり、商店街と共に「がんばる商店街」というイベントを開催することとなった。この取り組みは、湯浅誠さんが商店街で講演された際「商店街の人がわがことのように心配する居場所は見たことがない。多分、全国で初めてでこれから必要な居場所の形である」と教えていただいたことで実現した。福祉を中心とした商店街活性化を目指すことで、商店街とも支え支えられる関係が構築していけるのではないかと考えている。

(文責 川崎敦子)

地域循環型未来食堂「みんなの食堂」とは？

循環型未来食堂「みんなの食堂」は、地域の人々と一緒に作る食堂です。生きづらさを感じている若者、孤食のお年寄りや学生、子育て中のママなど、誰もが居場所にできる場所を「食」を通じて作り出します。

▼みんなの食堂で生み出す地域の循環図



みんなの食堂が目指す、
ミッション・ビジョン・バリュー

ミッション
MISSION

誰もが幸せと
思える

ビジョン
VISION

共に支え合う社会
ゆるく繋がる地域

バリュー
VALUE

共感できる

競争や大量消費、大多数の求めるものを提供するのではなく、少人数の思いも取り入れられるような無形成の価値を作ることが必要であると私たちは考えます。その無形成の価値は、私たちと関わる全ての人・地域との共感から生まれると思います。そのためにみんなの食堂は誰もが幸せと思える活動に取り組んでいきたいと考えています。

インスタグラムにて、最新情報お届け！

@minna.minsyoku

みんなの食堂 (みんしょく)

検索



令和5年度 地域循環型未来食堂「みんなの食堂」営業日数、販売実績

《営業集計》

月	営業日数	定食販売数	お弁当販売数	お惣菜販売数	外部販売数※	
4月	16	27	328	75	15個+オードブル	
5月	14	33	318	49	0	
6月	17	23	373	121	0	
7月	20	18	416	121	15	
8月	15	20	387	80	114	
9月	16	24	323	50	0	
10月	12	11	233	42	30+オードブル	レンタル2件
11月	16	59	282	68	11	
12月	15	20	214	45	25	
1月	14	27	249	64	25+オードブル	
2月	13	29	256	79	0	
3月	16	-	-	-	-	レンタル1件
	184	291	3,379	794		

※外部販売

《商店街イベント》

日程	販売数
11/30	11
12/3	25
1/28	25

《コージータウン発注のオードブル》

15名分
日程：4/6,10/6,1/28

《夏休み支援弁当》

毎回15個前後
日程：7/31,8/1-2,8/7,8/9-10,
8/21,8/23,8/25

おすすめDAY 開催時の様子

《おすすめDAY》

開催日	大人	子ども
4/16	28	22
5/21	32	34
7/29	24	19
8/18	17	16
9/14	35	34
10/22	28	31
12/16	26	21
1/27	26	13
2/17	23	18



フードロス食材を
提供いただきました皆様
ありがとうございました!



《アートフェスタ勝負市（6/11）》

- ・おにぎり34升分
- ・きゅうり100本
- ・ドリンク50個
- ・縁日160回

令和5年度 地域循環型未来食堂「みんなの食堂」視察

月	日	曜日	視察団体	人数
4	30	日	高島市ファミリーサポート「たすけあい高島」	5名
5	28	日	厚生労働省	3名
7	11	火	彦根市議会議員	5名
9	21	木	彦根東高校教員・学生	10名
11	7	火	鳥居本養護学校教員	2名
11	29	水	京都YWCA	4名
11	30	木	京都生活クラブ	10名
1	29	月	高島市役所福祉課	3名
1	29	月	高島市社会福祉協議会	4名
2	5	月	大阪生活クラブ	14名
2	21	水	児童養護施設「結の里」	
2	21	水	アストロゼネカ米原工場	

1月29日（月） 視察の様子



令和5年度 地域循環型未来食堂「みんなの食堂」講演

月	日	曜日	講演依頼団体	講演者
5	11	木	彦根ロータリー	川崎
7	21	金	滋賀県立大学地域共生センター	川崎
11	4	土	日本質的心理学会 第20回大会	川崎
12	20	水	重層的支援体制整備事業にかかる勉強会	川崎

食堂マネージャーとしての役割

大宮 彩菜

食堂のいち店長として、そしてマネージャーとして「みんなの食堂」に関わり、約3年経とうとしている。右も左も分らない状況でここまで来れたのは、食堂に関わる皆様のお力添えと、店長同士のチームワークであると思う。お弁当の話はもちろん、食堂をどのように盛り上げたらいいか、食堂をもっと知ってもらうには・・・？など共通の話題を一緒に考えて考える時間が、とても有意義な時間であったと感じるからである。

私がそう思うようになってから、マネージャーとして店長さんに伝えてきたことがある。

それは「一人ではないということ。」

メニュー考案や調理は一人かもしれないが、その背景には色んな方の思い、協力があってこそ自分の夢を叶えることができる場所だと感じていただきたい。知らず知らずにできた店長同士の見えない絆によって、店長自身もまた食堂に「居場所」を見つけることができる。

私はこの33年間、店長さんやボランティアさんの話に寄り添い、思いを共有することを一番に考えてきた。店長さんが少しでも食堂営業に対する不安を取り除けるように心がけてきたつもりであるが、実は私自身がその関係性に一番の「居場所」を感じていたのかもしれない。

様々な形で進化し続けるみんなの食堂。幅広い年齢層の方々が、気軽に足を運べる場所になるよう、今後の発展に期待したい。



食堂マネージャーとしての思い

北村 真穂

みんなの食堂に携わり約3年、私自身も食を通じてたくさんの繋がりを持つことができた。食堂に関わる人それぞれの思いが一つになって、『居場所』を作り上げ、色んな形で変化を遂げていく、それを見守ることができ、とても貴重な時間を過ごしてきた。

マネージャーとして店長が活動しやすいように、今までたくさん意見を交わしてきた。あらゆる方の話に耳を傾けてきたが、何よりも大事なのはやはり、みんなの食堂が継続的にオープンし、温かい居場所を提供できるかということだ。

今年度の取り組みの中でも商店街のイベントでは店長がお店を出したり、ボランティアとして子ども向けのゲームを考案するなど、普段の営業ではなかなか感じることの出来ない食堂の一体感を感じた。改めてここに携わる人達は、同じ方向へ向かうチームの仲間であるということを認識した。声をかければ誰かしらが助けの手を出してくれる。そんな安心感がここにはあり、利用される人とだけではなく、みんなが繋がっていると再確認できる。

食堂にいつも明かりを灯し、今日は何してるのかな？とふらっと立ち寄れる居場所であるように、今後も多様な顔を持つ『みんなの食堂』が楽しみである。



商店街における「みんなの食堂」とは

花しょうぶ通り商店街振興組合 理事長 和田 一繁

花しょうぶ通り商店街における「みんなの食堂」というテーマを頂いた。

既に「みんなの食堂」さんは、商店街にとって欠かすことのできない、みんなの居場所であります。自分がやりたいこと、自分ができること、地域が求めていることが可視化できる居場所であります。美味しい日替わりのお弁当も地域住民の方々にも喜んでいただいています。学び、遊べる地域の居場所として、子ども第三の居場所として、さまざまな分野（必要とされる）の人が集まり、繋げてくれます。今後も地域循環型未来食堂「みんなの食堂」と連携し、子どもから高齢者までを受け入れることのできる誰一人取り残さない社会・福祉日本一の商店街として舵を切り替え目指していきたい。



今こそ地域のつながりと支えあい

LLP ひこね駅の駅 駅長 小杉 共弘

産業構造の変化や高度情報化・国際化と共に急速な高齢化社会の到来などにより、社会構造や経済構造が大きく変化し、我々地方小都市の中心商店街商業者と共にそこに暮らす地域住民にとっても厳しい環境である。

このような状況の中、地域の高齢者や子供たちの居場所づくりに取り組み地域の絆を深め、これからもみんなが安心して暮らす街づくりを目指しています。

産業構造の変化や高度情報化・国際化と共に急速な高齢化社会の到来などにより、社会構造や経済構造が大きく変化し、我々地方小都市の中心商店街商業者と共にそこに暮らす地域住民にとっても厳しい環境である。

このような状況の中、地域の高齢者や子供たちの居場所づくりに取り組み地域の絆を深め、これからもみんなが安心して暮らす街づくりを目指しています。

安全な環境の確保：犯罪の予防や防犯対策を徹底し、住民が安心して生活できる環境を整え、毎日の衣食住が多彩で学校や病院等の基本的な公共施設が充実している。近年は高齢者向けの施設や子育て支援施設の整備も重要です。

コミュニティの活性化：住民同士の交流や地域の結びつきを促進することが大切です。地域のイベントや祭りの開催、地域団体やボランティア活動への参加の機会を提供することで、地域の絆を深めることができます。

緑地や自然環境の保全：公園や緑地の豊かな自然環境は住民の心身の健康にも貢献します。

交通の利便性と安全性：公共交通機関の整備や道路の安全対策、自転車や歩行者の利便性の向上など住民が安全かつ便利に移動できる環境を整えることが求められます。

これらの要素を総合的に考慮しながら、地域の住民や商店街、NPO と協力して安心して暮らす街づくりに取り組んでいくことが何より大切です。

地域の特性やニーズに合わせた具体的な施策を計画し、実行することで住民の満足度や幸福感を向上させることが可能です。

今後も特定非営利活動法人「芹川の河童」の献身的サポートを頂きながら城下町の伝統的商店街が誇る歴史の匂い、人の温もりと文化の輝き等、独自のSI確立とオリジナルな街づくりを進めながら、21世紀にあるべきオンリーワンの商店街を目指し引き続き商店街振興と地域活性化の促進を図る所存です。

重層的支援体制整備事業とNPO法人芹川の河童の活動

彦根市福祉保健部社会福祉課 自立支援係長 小川 祐輝

従来、福祉分野では高齢・児童・障がい・生活困窮といった分野ごとに支援体制が構築されていた。しかし、近年、複数の分野をまたぐような相談が増えており、令和3年4月の改正社会福祉法において包括的な支援体制の構築を目指す「重層的支援体制整備事業」に関する規定が設けられ、彦根市も同事業に取り組んでいる。

芹川の河童にも、こうした取組の一部を担ってもらっている。ひきこもりの若者やヤングケアラーなど芹川の河童の支援対象はいずれも、生きづらさを抱えながらも従来の制度ではなかなか支援が行き届きにくい人たちである。こうした人たちをも包括的に支援することはまさに重層的支援体制整備事業の目指すところであり、今後も官民連携しながら「断らない支援体制」を構築していきたい。

地域の居場所、必要とされる居場所

弁ちゃん堂 佐々木 悦子

みんなの食堂と関わらせていただき、早や4年が経とうとしている。店長とはしては3年、今も変わらず地域の居場所としてみんなの食堂も私も存在しているように感じる。「地域のお弁当屋さん」のイメージは強いが、知人、友人以外にもランチのお客さまもちらほら来られ、食堂の中でもひと時を楽しんでおられるようにも思う。

一昨年までは月1回くらいの出店をしていたが、昨年からは週1回の出店に挑戦している。それは、私自身がみんなの食堂や社会支援について魅力を感じているからだ。普通の飲食店では得られない温かさ、お客さまとの距離感、また同じ仲間がいるということ、いろんな魅力がある。また、ヤングケアラーさんをはじめ、子どもたちへの料理の提供など、本当に必要とされている方への料理を作れることは料理人としてもやりがいを感じる。これからも地域の居場所、必要とされる居場所の一員として活動していきたい。

人が集まる場所

みょん。 保田 千明

みんなの食堂で携わって2年目となりました。

行動制限もなくなり、人の移動も昔の様になり、食堂にもたくさんの方が出入りする様になり、活気が溢れてきたと感じています。

手助けが必要な方に差し伸べられることは、自分自身にもプラスになり、そこから他のつながりになり、飛躍したものとなりました。

これからは食を通じて、違う方面にも活動出来る年になりたいものです。



新たな活動拠点

wa.U 田村 ゆう子

「食」が好きで大切に、食を通して誰かに喜んで貰えることがしたいと飲食業で勤務する中で、レンタルキッチンを借りてチャレンジ出店をしました。夢だったマルシェにも出店しましたが、利用していたレンタルキッチンが休業されることになり活動場を探していました。

みんなの食堂を知り、興味があったフードロス、福祉の場、全てが繋がっていることに興奮し、店長をすることにしました。以前の出店に来て下さったお客さまがみんなの食堂を知って下さり、楽しみにして下さる方もいて、月に一度の出店ですが励みになっています。

また、レンタルキッチンとして食堂をお借りし、もう出店は無理かと思っていたマルシェにも出店させていただきました。

食堂は新たな活動拠点、食と人との繋がりを大切にしていきたいと思っています。

あたたかい窓

Puoli 西村 美甫

兼ねてより大好きな料理を通して人と繋がれる場が欲しいと考えていたのだが、SNS を通してみんなの食堂を知った。何度か訪れた際に店頭で新しい店長募集のチラシを見て心が踊ったのも記憶に新しい。

川崎さんとの面談を経て活動理念に共感し、1月から実際に1日店長としてお世話になり始めた。フードロスの野菜を使って、いかにお客様に喜んでいただけるお弁当を考えるか、準備期間も含めて新鮮で良い経験となっている。

また個人的には、SNS 以外での繋がりが減っていた友人達がお弁当を買いに来てくれたり、他のお客様達も『楽しみにしてたよ』と声掛けしてくださるなど、自分と人が繋がるあたたかい窓口としても意味を持った活動になっていると感じる。まだ始めたばかりであるが、お客様にとってもそういうあたたかい場所であるように、自分自身も学びながら続けていきたい。

私の楽しみ

akaneiro 吉川 茜

2022年6月から参加させていただいている「みんなの食堂」。今年の6月で2年を迎える。私にとって、チャレンジだった食堂が、今では「今度はこの野菜でどんなお弁当にしようか」「どんなお客様が来てくださるのだろうか」と営業を楽しみにしている。まだまだ、メニューの幅や調理方法など、未熟なところはある。しかし、子育てをしている母親として、子どもが食べやすく、想像ができるおかずを心がけて献立を考えるようにしている。

お客様も家族で召し上がってくださる方が多く、今後家庭の食卓に並ぶような親しみのあるお弁当作りを心掛けていく。そして、「体は食事からできている」私の大切にしている言葉で、多くの方々にこれからもお弁当を提供していきたい。



子どもの成長とともに

akaneiro 吉田 見真

私がみんなの食堂を始めたきっかけは近所のママ友からのお誘いがあったからだった。その時はまだ生後7ヶ月頃の娘がいて子育てしながらできるか不安だったが、自分なりに何かに挑戦したい時期でもあったため最初はサポート役として携わるようになった。その後、1年経った頃に店長になり、今では共同店長として月2回程活動が続けている。始めた頃は赤ちゃんだった娘も今では2歳半になり、お手伝いをしてくれたり、お客様に挨拶ができるようになったりと活動しながら子どもの成長を感じることも多い。

子育てしながらでもできることがあると知ることができたこと、自分自身にも子どもにとっても気分転換の場所になっていることを嬉しく思う。そして、そういった場所に誘ってくれた友だちと来てくれるお客様に感謝を忘れずに活動していきたい。

食べたものが未来の体をつくる

夢のたまご 佐々木 貴代

みんなの食堂で1日店長をつとめるようになり約3年。たくさんの食材を目にすると、あれもこれもおいしく食べたい!そんな私の欲からメニューを決める際は、「めざせ!1日30品目」をこころがけています。かつ、「簡単&時短」。どんな風にしがられるのだろうか?とドキドキながら提供させて頂いているお料理は、明日の体をつくる大切なもの。

食べることを通して、皆さんが健康で過ごしていただけるようお手伝いさせていただけるみんなの食堂が大好きで、これからも1日店長であり続けたい。

～夢のたまご～たまごのなかには、みなさんの夢がいっぱい。私の好物のたまごを使って、みなさんの夢が叶うようお手伝いできることを願いつけた店名です。





ありがとうございます

ボランティア 森 恵子

私がみんなの食堂ボランティアに参加するようになって今年で4年目を迎える。今年度も新しい店長に出会うことができた。料理上手な店長を尊敬している。

私は料理が苦手なので、主に開店準備とお弁当を詰める役割をしている。自分の空いた時間に、行ける時だけのボランティアだが、いつしか私の毎月のスケジュールとなっている。

何もできない私だが「いてくれるだけで助かる」「助けてくれてありがとう」と言ってもらえるのが嬉しくて、喜んで行っている。フードロスの野菜たちが美味しい料理に出来上がっていく様子が見られるのも、ボランティアの醍醐味である。無理はしなくとも、誰かの役に立っている、それがボランティアだと思う。

【 食材提供者 株式会社パリヤ様よりメッセージ 】

いつも元気もらってます！

皆様こんにちは！パリヤ P マート店長の阪東龍也です。2020年3月から食材の提供を開始させていただき早4年が経ちました。みんなの食堂のスタッフさんは、雨の日も雪の日も欠かすことなくいつも笑顔で野菜の引き取りに当店まで足を運んでくださいました。私はその姿を見ていつもパワーをもらい、皆様のパワフルさにいつもに感心していました。

また、行き場の無かった野菜たちも各店長さんの素晴らしい腕前で素敵な料理に生まれ変わっていることにもいつも感心させられました。

地域の居場所が「食」を通じて貢献できることを誇らしく感じます。これからも微力ながら協力させていただきます。宜しくお願い致します！



株式会社パリヤ
店舗運営部長兼 P マート店長
阪東 龍也

【 フードバンクとして関わる団体様 】

「もったいない」を「ありがとう」に！

フードバンクひこね ボランティア一同

フードバンクひこねでは、家庭などで余ってしまった食材などを集めて、必要とされている個人や子ども食堂などへ提供する活動を約7年間続けている。SDGsの取組が広がる中で“食品ロス削減”や“困ったときはお互いさん”の意識も高まり、ここ最近は多くの寄付食材が集まるようになってきている。

みんなの食堂が始まった頃はお米程度しかお渡しすることはできなかったが、調味料やお菓子などを提供する機会も増え、「もったいない」を「ありがとう」へつなぐことができている。

ボランティア活動ではあるが、私たちの活動が少しでも地域の役に立っていることがとても嬉しい。これからも誰かの「ありがとう」につながるよう活動を続けていきたい。



地域共生社会実現に向けた居場所活動

滋賀の縁創造実践センター 社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会
地域福祉課 副主幹 岩本 紀子

特定非営利活動法人芹川の河童（以下「芹川の河童」とのえにしは、子ども食堂の活動を通して始まった。

「食でつながる地域の居場所」として「みんなの食堂」を運営され、従来の支援では制度の狭間にあり、支援が難しかったひきこもりや生きづらさを抱えた若者の居場所として、また困りごとや悩み等を集まった人での共有や相談、地域課題を行政へ伝える役割など、重層的な支援の場にもなっている。その他に、日替わり店長や食品ロス食材の受入れ等にも取組むなど、地域循環型未来食堂としての活動もしている。

地域共生社会の実現に向けて、このえにしを大切に、私たち滋賀県社会福祉協議会も芹川の河童の取組みを応援していきたい。





商店街 × 福祉 = 持続可能な居場所

令和5年度滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業、
令和5年度彦根市がんばる商店街応援補助事業

商店街の中にある、みんなの居場所見学会 in 花しょうぶ通り商店街

第1回

11月18日（土） 商店街と「若者の居場所」 参加人数：20人
見学 通信サロン「誰にも会いたくないカフェ」
講演 「今、校内居場所カフェが学校に求められる理由」 NPO 法人パノラマ 石井正宏

第2回

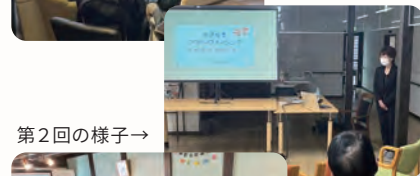
12月3日（日） 商店街と「老人の居場所」 参加人数：25人
見学 友仁ナースィングホーム河原
講演 「めざせ！アクティブエイジング」 友仁山崎病院 副看護部長 三上知恵

第3回

1月28日（日） 商店街と「子どもたちやヤングケアラーの居場所」 参加人数：23人
見学 地域循環型未来食堂「みんなの食堂」
講演 「ヤングケアラーってなあに？～経験者より支援者として出会うかも知れないあなたへ～」
任意団体 K& 代表 冠野真弓（ラフティングケアラーかんちゃん）



←第1回の様子



第2回の様子→



←第3回の様子

花しょうぶ通り商店街は、20年前から様々なテーマの街の駅を設置することで商店街活性化を目指してきた。当法人の居場所も、街の駅をお借りして運営している。花しょうぶ通り商店街第3の街の駅通信舎では、若者の居場所である通信サロン「だれにも会いたくないカフェ」。花しょうぶ通り商店街第5の街の駅 minnna では、地域の居場所である地域循環型未来食堂「みんなの食堂」・子どもの居場所である子ども第三の居場所「みんなの食堂」。

厚生労働省の研修では、人は困りごとができたときいきなり行政や専門家に相談できない。困りごとの半分はコミュニティカフェから入ってくると位置付けている。NPO 法人パノラマの石井氏は、相談できる勇者・支援を受けられる勇者として相談・支援を受けることがいかに難しいかを話しておられる。

また、特定非営利活動法人全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長の湯浅誠氏は、コミュニティカフェの役割は、黄色信号の人を赤信号にしないための支援をする場所、黄色信号の人と出会うためには青信号の人が来れる場所いわゆる誰でも利用できる場所がいいと言う。商店街が運営する街の駅で居場所を運営するということはこの定義に合致するとともに、ヤングケアラー支援はこのような形態が支援に向いていることが分かってきた。さらに湯浅氏は、「商店街の人がわがことのように心配する居場所を見たことがない。これからの必要な居場所であるのでこのことをアピールした方がいい」と言ってくださった。この言葉は商店街と当法人の大きな宿題となった。

今回、居場所を知ってもらうこと、居場所に関連する福祉課題を理解してもらうこと、利用してもらうことを目的に講演会と見学会を実施してアピールする機会を得ることができた。

花しょうぶ通り商店街振興組合も当法人の居場所も、先進的な取り組みとして視察を受けることが多いが、今後は、双方を合わせた形で視察を受けていくことが必要であると考えている。（文責 川崎敦子）



がんばる商店街応援補助金事業について

花しょうぶ通り商店街振興組合 事業担当 和田 かずしげ

市のがんばる商店街応援補助金事業を活用し商店街をフィールドに、11月～1月の3ヵ月連続の講座を開催した。若者の居場所、老人の居場所、子ども及びヤングケアラーの居場所として、施設（居場所）の見学、取り組み内容とその分野の専門家による講演会、フードロスを使ったお弁当試食会を行った。講座を通じて支援活動における現状や課題を共有する事ができた。商店街が支えられる地域共生社会の実現に向けた新たな居場所として、訪れる、知る、学ぶことで商店街を利用する人を増やしていく、この持続可能な街づくりの先進的な取り組みを行うにふさわしい事業であった。

この事業を通じて商店街は商店主だけで形成しているのではなく、地域の人や、さまざまな人たちに支えられていると改めて感じる事ができた。

02

日本財団・子ども第三の居場所「みんなの食堂」

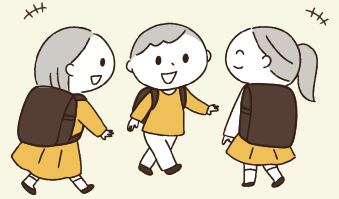
Supported by  日本財団 THE NIPPON
FOUNDATION



？ 子ども第三の居場所とは

すべての子どもたちに、安心できる居場所を

家庭が抱える困難が複雑・深刻化し、地域のつながりも希薄になる中、子どもが安心して過ごせる居場所がなく、孤立するケースは少なくありません。日本財団は、すべての子どもたちが未来への希望を持ち、安心して過ごすことができる「子ども第三の居場所」を設け、全国へと拡げていきます。この居場所が地域のハブとなり、子育てコミュニティが生まれることで、「みんなが、みんなの子どもを育てる」社会を目指します。



引用元：子ども第三の居場所 | 日本財団 <https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/child-third-place>

2年目を迎えた子ども第三の居場所は、手探りでいろいろ試していたことが定着したと感じている。学生リーダーの仕事も明確になり、参加する学生も増えた。学生ではないが就労支援として若者が参加するようになった。昨年まで学生リーダーとして活動してくれた多賀町の地域おこし協力隊で活躍する方や保護者で参加してくださった方など多くの方が関わってくれるようになった。参加の子どもも少しずつではあるが増えてきており、子ども第三の居場所が地域で認知されてきたことを感じている。

体験プログラムの講師になってくださるボランティアの方も増えているが、今年は特に学生リーダーや若者なども得意なことで講師になるという取り組みもしてきた。学生が準備から責任を持ち開催する体験プログラムは、私たち大人からみると子どもにできるのかという内容のものもあるが、子どもたちには大変人気である。また、大東建託さんの防災食試食会、認定 NPO 法人むすびえさんの防災勉強会、アストロゼネカさんのボランティアと外部からの参加も多数受け入れバラエティ豊かな体験内容となった。

特に人気であったのが、日本財団のご支援をうけたモリウミアスの取り組みである。石巻から魚介類が届き、子ども自らが調理し食べるという画期的な活動である。子どもたちには人気で、毎回10人定員がオーバーするくらいである。包丁を使うことはとても心配していたが、熱心に取り組む姿が見られ素晴らしい取り組みであった。

来年度3年目を迎える子ども第三の居場所「みんなの食堂」は、助成金最終年である。地域循環型未来食堂「みんなの食堂」の運営を自立することが、今後の自立した運営に不可欠であると考えている。子ども第三の居場所「みんなの食堂」と地域循環型未来食堂「みんなの食堂」の二つの運営の発展を模索することが必要であると考えている。そのうえで、子ども家庭庁が推奨する子ども支援にも積極的に取り組んでいきたいと考えている。まずは、このような機能を活かした街の困りごとを引き受ける事業を、行政と相談しながら考えていく必要がある。子ども第三の居場所「みんなの食堂」に子どもたちが多く参加してもらうために、一般に広く募集することと並行して、行政と連携した必要な子どもたちに開かれた居場所を作っていくことが必要であると考えている。

(文責：川崎敦子)

子どもの姿を共有する

滋賀県立大学 人間文化学部
教授 松嶋 秀明



子どもの第三の居場所の活動の中心は、大学生などのスタッフである。毎回の活動でプログラムを考えて実施しているが、こうすればよいというものがあるわけではない。関わりがなかで、果たしてこれでよかったのかという疑問・不安全感がでてくことも多い。私をふくめ専門的知識をもつスタッフもいるが、正解を知らないのは同じである。それでも、活動終了後、スタッフ各々がかかわった断片的な子どもの姿をだしあうなかで、ようやく、子どもにとって居場所での体験がどんなものであり、どう関わればよかったのかが見えてくこともある。

このように迷いつつ、皆でともに考えあっていくことこそが、子どもへの関わりをよくすることにつながるのではないかと考えている。



令和5年度 子ども第三の居場所「みんなの食堂」活動実績

令和5年度（令和5年4月1日～令和6年1月31日まで）

利用登録者数

内訳	未就学児	小学1年生	小学2年生	小学3年生	小学4年生	小学5年生	小学6年生	中学生	高校生
人数	9	5	6	13	4	7	3	3	1

※4名未確認

登録者学区（記載のない学校があれば追加してください）

学校別	城東小	旭森小	佐和山小	高宮小	城南小	河瀬小	東中	南中	高校	平田小	その他
人数	6	3	15	5	4	4	1	2	1	3	3

職員体制

内訳	常勤	非常勤	学生	アルバイト	ボランティア	その他
人数	2	2	15	1		2

開催回数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
12	11	13	13	10	10	8	8	7	12	8	

登録人数…………… 55名

開催日数…………… 143名

利用人数… 延べ950名

子ども第三の居場所「みんなの食堂」は、
お子さんの『できた!』を増やします。

子ども第三の居場所は NPO 法人芹川の河童と彦根市が協定を結び、日本財団より助成を受けて運営を行っています。

城東小学校、佐和山小学校、彦根東中学校のお子様は学校帰りにご利用可能。また、保護者送迎を行っていただけるご家庭はお住まいに関係なくご利用いただけます。

お子さんがのびのび成長する、
さまざまな体験プログラムを
ご用意しています。



体験プログラムの最新情報・体験の様子はInstagram
からご覧いただけます。

@kodomodai3_ibasyo

子ども第三の居場所 - 利用案内 -

毎週 月 水 土 に開設しています。

利用料金

事前予約制 1回 200円

事前に10回分の回数券を購入してください

利用料金は、活動の保険などに当てられます。体験に関しては別途材料費などがかかる場合があります。

＊児童扶養手当や就学援助を受けているご家庭は無料でご利用いただけます。

利用人数

1日あたり 15名 まで

法人責任者、主任指導員、大学生リーダー等、みんなの食堂マネージャーで、お子様の活動を見守ります。

親子参加もお待ちしております

日々の生活や子育ての悩みなど、不安を抱える親御さんのお話を担当スタッフがお伺いします。

利用時間

最大 15:00～19:00 まで

自分で通える子どもは 15:00～17:00 まで、送迎可能なご家庭の子どもは 15:00～19:00 まで利用可能です。



令和5年度 子ども第三の居場所 体験プログラム 開催実績

実施日	内容
4月1日	彦根城へお花見
4月8日	ゲーム大会
4月15日	獲れたて筍でお料理
4月22日	鯉のぼりと兜づくり
5月13日	ゲーム大会
5月20日	子どもヨガ教室
5月27日	福満公園で遊ぼう
6月3日	勝負市の看板を作ろう
6月10日	勝負市でポップコーン屋さん
6月11日	勝負市でポップコーン屋さん
6月17日	モルック大会（甲良町総合公園）
6月27日	パン作り教室
7月1日	七夕飾りを作ろう
7月8日	多賀あけぼのパークに行こう
7月15日	小麦粉粘土を作って遊ぼう
7月22日	パフェを作ろう
7月29日	うちわを作ろう
8月5日	世界昆虫展へ行こう
8月19日	デイキャンプ（多賀高取山ふれあい公園）
8月26日	かき氷を作って食べよう
9月2日	動く動物を作ろう
9月9日	流しそうめんをしよう
9月30日	片栗粉スライムを作って遊ぼう
10月7日	マジック&バルーンアートショー
10月14日	防災時の非常食試食会（大東建託）
10月28日	よく飛ぶ紙飛行機を作って飛ばそう
11月6日	防災教室（むすびえ）
11月11日	デッサン教室
11月18日	えびす講へ行こう
11月25日	米粉ピザを作って食べよう
12月2日	クリスマスリースを作ろう
12月9日	くるくるオットセイを作ろう
12月23日	クリスマスケーキを作ろう
1月13日	水だんこで遊ぼう
1月20日	いろんな福笑いを作って遊ぼう
1月27日	ゲーム大会
2月3日	節分を楽しもう
2月10日	チョコ菓子を作ろう
2月17日	スライムを作って遊ぼう



どんどん焼きたいから
みんな食べて～



もっといっぱい
つけようね！



体験プログラム開催の様子&参加した子どもたちのコメント



空き缶で
ごはんがでるんや!?



(志萱さんの) パフェを作ろう



ここに違うスライム
つくるねん



今日このゲームマスターを倒すぞ!



(西山さんお手製の) 福笑い



実体験を通した居場所づくり

芹川の河童 学生リーダー 倉重 優香

私は子ども第三の居場所の学生リーダーとして活動してきた。主な活動内容としては、子供の見守り、イベント企画・運営、その他ヤングケアラー講座の参加等といった活動が挙げられる。

特に私が一番印象的だった活動は月一度行われる「モリウミナス」である。そこでは月によって扱う食材が異なるため、子供たちに対しての食育の役割も果たしている。そして、大人も子供も実体験として楽しみながら学ぶことができるため、和気あいあいとした雰囲気で行っていたのがとても良いと感じた。

子供たちの居場所として機能していくためにも、「モリウミナス」のように実体験を通して『また来たい』と思える活動をもっと増やしていきたい。そのためにも子供たち一人一人と対話していきながらニーズも明確にしていく必要があるだろう。

子どもを深く知る

子ども第三の居場所 学生リーダー 関口 梓月

私は学生リーダーとして子ども第三の居場所に来る子どもたちと関わっている。その中で私が大切にしていることは、子どもたちを深く知ることである。関わりの中でたくさん会話をしたり、何気ない様子を観察したりして、子どもたちの素敵なおところ、成長したところ、困っていることなどについて知ることが大切に行っている。それを子ども第三の居場所のスタッフの皆で共有することで、子どもたちの成長を共に見守ることができる。

これは、一緒に遊んだり、ご飯を食べたりして、近くで子どもたちと関わるからこそできる学生リーダーとしての重要な役割であると感じている。これからも、子どもたちの成長を近くで見守っていきたい。

子どもに合った企画づくり

子ども第三の居場所・日中一時支援事業 角田 涼太

子ども第三の居場所では、料理や工作といった体験プログラムを土曜日に実施している。この体験プログラムの企画は学生リーダーにも任されており、私は「片栗粉スライムをつくってあそぼう」という回を企画した。片栗粉スライムとは、片栗粉に水を加えてトロトロとした感触を楽しむものである。子どもたちは、その不思議な感触や食紅での色づけを楽しんでくれた。子どもたちの中で特に夢中になって取り組んでくれたのは、普段は1つのことに集中するのが苦手な子であった。実はこの回は、感触遊びであればその子も集中して取り組めるのではないかと企画したものであり、その目的は達成できたといえる。皆が夢中になって楽しめるような企画づくりは難しいが、子どもたちの興味や特性に合った企画を考えていきたい。



子どもを感じ、感じたい

ボランティア 西山 直美

誰もが各々様々な環境の中で精一杯生きている。環境を変えることは容易ではない。だからまず、自分の置かれた環境を受け入れる。その中で自分らしく輝きながら、力を蓄えより良い未来へ＝明日へGO！

子ども第三の居場所に子どもたちがやってくる。子どもも各々様々な環境の中で育ち生きている。子どもですもの、、、。なおさら自力でおかれた環境を変えることは難しい。でもね、環境を受け入れながら、屈することなく一人ひとり輝いてほしい。

子ども第三の居場所に子どもたちがやってきた。「こんにちは」「こんにちは」声、表情、行動、全身で子どもたちは表現してくる！訴えてくる！言葉にはできない私の思いを分かってほしい！私の心を感じてほしい、、、と。

各々様々な荷物を背負って子どもたちはやってきた。大丈夫だよ！安心して！さあ荷物を下ろして！良かったら少しお手伝いをさせてもらいましょうか？

さあ、一緒に遊ぼう、一緒に作ろう、一緒に描こう。ビリビリ、シュッシュッ、くるくる、トントん、ペタペタ、、、楽しいね！心を開放して楽しもう。楽しむことはよりよい明日につながる勇気と活力の素になるのだ。



食からの学び

ボランティア 志萱 早紀子

みんなの食堂で約2年間日替わり店長をやった後、ヤングケアラーの方への食事提供を始めて2年目になる。料理好きな私が何かの役に立てたらという想いでやってきた。

ヤングケアラーという知名度の低い言葉は当然私も聞いたこともなくその言葉の意味を知ることから始まり、今ではそういった子どもたちが意外と多い事も知った。食事提供をすることにより「物理的な時間」だけではなく、ホッとする「心の余裕」が得られるのではないかと思います。また「子ども第三の居場所」では「米粉ピザ」をみんなで作り、手作りの楽しさを体験してもらえた。私も沢山の方達と繋がれて楽しかった。

普段何か社会の役に立ちたいという想いはあってもどうすれば良いのか入口もわからなかった私が、みんなの食堂に関わらせてもらったお陰で微力ながらお手伝いできたことは私の学びの時間にもなり、今後の活動へのヒントをもらえたようだ。



子どもの居場所への送迎サポートし、子どもが通いやすい環境を整えています



芹川の河童 専用送迎車

日本財団様よりNPO法人芹川の河童へ
寄贈いただきました



はぴとも号

彦根市社会福祉協議会が運行する
「はぴとも号」第1号として
近江タクシー株式会社様の送迎がスタート！



居場所支援の様々なカタチ

社会福祉法人彦根市社会福祉協議会 地域支援課 奥村 友星

当団体の特色と言えば、『地域循環型』の部分ではないでしょうか。商店街という地域性を活かし、周りの住民や他の活動者たちと混じり合いながら、多くの方が活動に参画されている。

活動を実施する上では、場の提供、人の紹介、食材の寄付といった間接的な関りも大事なサポートであり、それぞれができる範囲で活動に関わることで、間口の広さも当団体の魅力のひとつではないかと思う。

市社協では『子どもの幸せを応援する基金（通称はぴとも基金）』を設立している。子どものために”という想いで寄付くださった方々も、各活動にとって大事なサポーターである。

こうした、多様な支援のカタチと居場所がつながり、上手く循環していくことが、子どもたちの居場所の充実や継続につながるのだと思う。

みんなの食堂で

防災 を考える日

2023年10月14日開催

大東建託さん主催による 防災食を食べよう

簡単な防災クイズのあとは、待ちに待った防災食の試食です。

お水を入れるだけでできるおにぎりや、そのままでもいいし温めたらなお美味しいおかずは、子どもも大人も大好きなハンバーグや肉じゃがなどなど。美味しい防災の勉強会でした。



2023年11月6日開催

NPO法人むすびえ主催による 防災の話

小学生から大学生リーダーまで、スタッフの方の話をしっかりと聞きました。

災害時の行動をPCの動画で一緒にやってみたり、災害時のケースごとの問題について、みんなで考えたりと、より防災が身近に感じられました。



日本財団・子ども第三の居場所「みんなの食堂」

MORIUMIUS

- モリウミアス編 -

森と海と明日へ

豊かな森と海に恵まれ、自然風景と伝統が色濃く残る石巻市雄勝町。東日本大震災によって町の8割が壊滅してしまいましたが、地域の復興への想いから、高台に残る築93年の廃校が新たな学び場として生まれ変わりました。それがモリウミアスのはじまりです。

モリウミアスは、こどもたちの好奇心と探究心を刺激する複合体験施設です。暮らしと自然が共存する環境を学び、それを活かしたアクティビティや多種多様な交流を通じて、たくましく生きていく力が湧いてくる。こどもたちが自然と向き合っ
て多くのことを学ぶように、街を訪れる人たちとの交流は雄勝町がより豊かに育っ
てゆくためのきっかけにもなります。

こどもたちと地域の明日をつくるために、モリウミアスは新しい出会いを生み出
していきます。

引用元：モリウミアスについて | <https://moriumius.jp/about/>



今年度は、子ども第三の居場所に日本財団のプログラムである森と海と明日（モリウミナス）を受けることができた。

「モリウミナス」は、宮城県北東部に位置する石巻市雄勝町にある廃校をリノベーションし、世界中の子どもたちに開かれた学びの場である体験型宿泊施設である。宮城県石巻市雄勝町は、年間を通して、ホタテ、ホヤ、牡蠣、銀鮭といった海の幸に恵まれるところである。石巻市雄勝町と第三の居場所を結び、子どもたちに体験を提供するプログラムである。

この取り組みは、**OLプログラム**と**現地プログラム**という二つのプログラムから形成されています

OLプログラム



日時：毎月第2月曜日 16:30-8:30

場所：子ども第三の居場所「みんなの食堂」

内容：モリウミナスとリモートでつなぎ、魚介をメインに包丁をつかって、料理を行い食べる取り組み。

この取り組みは子ども第三の居場所「みんなの食堂」では、とても人気の体験プログラムの一つである。毎月、ホタテ、アナゴ、ウニなど子どもたちには見たことのない魚介が届き、包丁を使ってさばいて料理し食べるということはそう体験できることではないと思い取り入れることにした。

初めての体験では、スタッフは右往左往、子どもたちもリモートのやり取りに慣れずだらだらしている様子。この様子を見ていたスタッフは、「来月はもう誰も来ないだろう」と思ったほどであった。しかし、作ったら楽しい、食べてみたらおいしい、おまけにお土産付き。子どもたちは「楽しかった、また来月も来るわ」と言っていた。おいしいって最強、まさに食の力を思い知らされたのである。10人限定の取り組みに毎回応募が殺到するようになった。

ウニをさばいたときいがいがの殻に怖いと泣く子もいたが「食べたらおいしい」と言っていた。マグロは鉄火巻きにしたが、こっそりマグロの握りを作ることができて「お母さんに食べさせたい」と言っていた。リモートでのモリウミナスのスタッフとのやり取りにも慣れ、クイズにも積極的に参加する姿がほほえましかった。

この取り組みは、子どもの成長が毎回見られる素晴らしいプログラムであると感じている。

（文責 川崎敦子）



現地プログラム

日時：2023 年 9 月 15 日（金）～ 9 月 18 日（3 泊 4 日）

場所：宮城県石巻市雄勝町 「モリウミアス」（東京で前泊）

内容：大人と子どもに分かれ生活。子どもは、動物のお世話、海での漁の体験、山での森の手入れ、薪割り、食事作りなどを体験することで、自然との循環と命、そこでの生き方を学ぶ

参加者：子ども 6 名 大学生スタッフ 2 名 スタッフ 3 名

石巻に本当に行けるのであろうか。担当スタッフの率直な疑問であった。子ども第三の居場所を利用するヤングケアラーの高校生が、最初に行くことを決意してくれたことから動き出した。実にか月前である。参加希望の子どもが増える中で特に印象に残っているのは、ヤングケアラーの高校生の兄弟である中学生である。子ども第三の居場所に誘い掛けること約 1 年、「モリウミアスに行きたい」で子ども第三の居場所に来てくれるようになった。

現地では、大人と子どもは一緒になることはない。子どもたちはモリウミアスのスタッフと生活するのである。山に登り、海で釣り、動物の世話、食事作りなど家ではできない体験をした。当法人のスタッフは、各拠点との交流とモリウミアスの代表の油井元太郎氏（キッズニアプロデューサー）とのディスカッションなど大人のメニューをこなす。

帰ってくる日、居残り組のスタッフは「きっとへとへとに疲れて帰ってくるだろう」と駅まで迎えに行った。新幹線を降りてきた子どもたちは「楽しかったー」「もう一回行きたい」と意気揚々と元気に帰ってきてびっくりした。なぜか子どもたちがちょっとたくましく見えた。もちろん大学生スタッフも。「モリウミアスで働きたい」と高校生はあちらで働くことの相談もしてきたと話していた。中学生は「ニトリ世話してかわいかった。将来はペットショップで働きたい」と話していた。大学生のスタッフは、「大学の時代にあの研修施設に行けたのは人生の財産。出会った大人の話も聞いておいてよかった」と話してくれた。

私たちの願いは、子どもたちが紆余曲折あっても健やかに育ってほしい。だからこそ、寄り添う続けることが仕事であると思っている。寄り添い続ける何年か先に、子どもたちの未来が健やかなものになることを信じている。モリウミアスの体験は、それを 4 日間で子どもの発達に影響が出るほどの威力があるのだと体感することができた。ここから作られた子どもたちの未来を、後押しできる寄り添える場所を続けていくことが私たちの使命であるとする。

（文責 川崎敦子）



令和5年度 モリウミアスOLプログラム 活動実績

2023.4.10

第1回

つぶ貝編



最初は難しそうと思ったけど、...
できた

2023.5.8

第2回

銀鮭編



骨いっぱいあるなあ

2023.6.12

第3回

タコ編



おいしー！

2023.7.10

第4回

カツオ編



カツオのたたき丼を
自分で作れてよかった

2023.8.7

第5回

ウニ編



ウニ触るの怖いー！
(たべてみたら) うまー！！

2023.9.11

第6回

アナゴ編



包丁さばきがうまくなってきたね

2023.10.16

第7回

アイナメ編

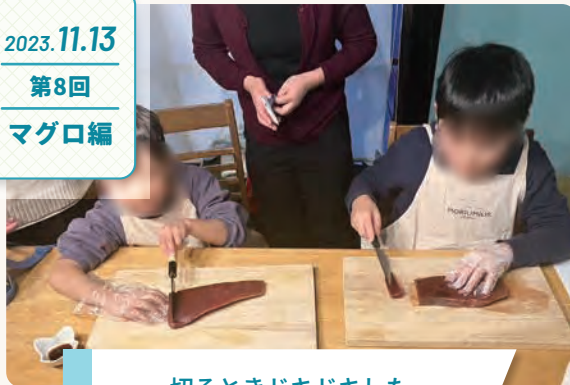


疲れた、、、切るの

2023.11.13

第8回

マグロ編



切るときドキドキした

2023.12.11

第9回

ホタテ編

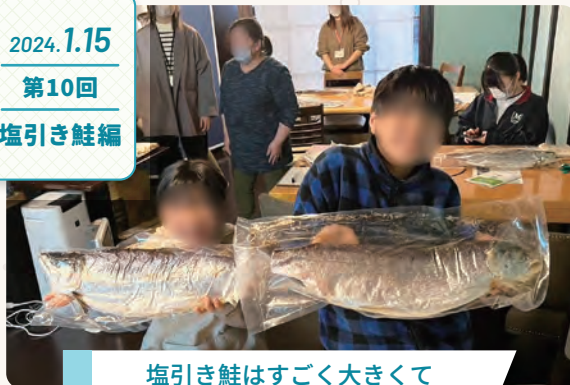


うわあー、これってなにー？

2024.1.15

第10回

塩引き鮭編



塩引き鮭はすごく大きくて
重かったです

2024.2.19

第11回

みそ作り編



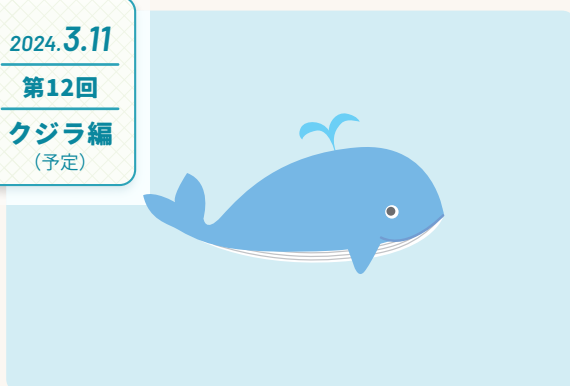
豆つぶしたい！
私も混ぜる！！

2024.3.11

第12回

クジラ編

(予定)



令和5年度 モリウミias現地プログラム 活動実績

参加した子どもの声

なまえ 國安 祐水

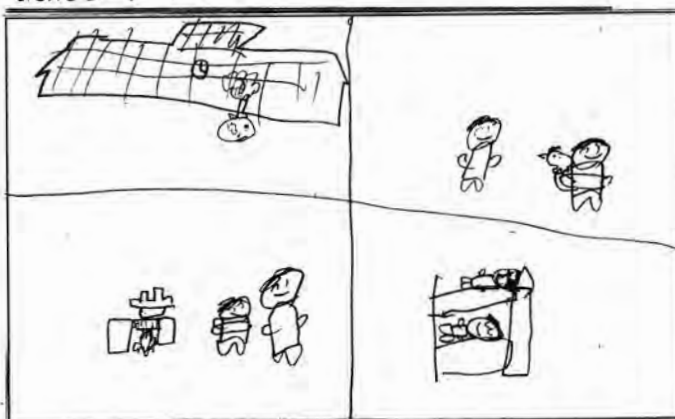
モリウミias



私は、モリウミiasに行って、暮らしと自然の両立した生活をしてみたいと思いました。私の普段の生活では、ご飯は辛い飯屋でなく、風呂は電気で使えます。しかし、モリウミiasでは、ほじめて、お湯で火を使ってお飯もたき、風呂を火で湯を沸かしてわかしました。普段との違いに驚きました。次第に面白く感じるようになっていきました。また、モリウミiasでは、海が近いこともあり、私の苦手な魚貝類がたべてくれました。私は、頑張ってホタテを食べてみました。うると、思ってたよりも美味しく、他の魚も克服して食べることができました。モリウミiasでは、たくさんの経験を与えることができ、良かったです。

参加した子どもの声

なまえ 國安 佑成



ぼくがモリウミiasに行って、おどろいた事は、大人と子どもが分かち合える生活することです。子どもは、スタッフといっしょにご飯をたいたり、山に出かけたり、海に行ったりして、すごし、お風呂も子どもたちで入ります。朝起きると、ご飯の用意をしたり、うじをしたり自分たちが出来る事は、友達と力を合わせてがんばっていました。

家のくらしとくらべて大変だったけど、楽しかったです。にべりをさあるとふふふでした。また、モリウミiasに行きたいです。

モリウミiasでの成長

中畑奈緒

3日間寝食は大人と子ども完全に別れての生活でした。日中の活動は釣りや薪割りなど様々なプログラムがありましたが、子ども自身が自ら選び自分で考えて取り組むことが前提でした。

施設では鶏が放し飼いにされており、初めは近寄ることさえできなかった子ども最後は抱っこするまでになっていました。色々な活動において子どもだけで大丈夫かなと不安に思うこともありましたが、こちらの心配は他所に何事も積極的に取り組み、最終日には子どもたちそれぞれが来た時よりも遅くなっていたように思います。

これからは子どもの可能性をもっと信じて、先回りせず失敗を経験させてあげて、自分で学びを得ていくことも子どもを見守る大人としての大切な役割だと感じ、子どもにとっても大人にとっても学びのある非常に貴重な経験となりました。



モリウミアスへの引率を終えて感じたこと

職員 國安 裕香

たった3日間の体験ですが、体験するのとなしないのでは、大きな違いがあるということを学べた旅でした。旅の中で子供達の表情が柔らかく、明るくなっていくのが分かりました。

施設には、いつもは釘付けになるテレビも携帯電話もありません。ダラダラ食べたくなるお菓子や甘い飲み物もなく、普段の暮らしには欠かせないクーラーもありません。そんな中だからこそ、気付けることがあるのだと実感した3日間でした。

普段はなかなか触れられない動物とのゆったりとした触れ合いや自然豊かな環境での生活、自分達で出来ることは掃除や料理も友達と協力しながら取り組む事で、直ぐには身に付かなくても直接、見たり、聞いたり、触れたりすることで心の中に変化があり、それが表情にも表れていました。スタッフに愚痴や弱音を吐きながらも、最後まで頑張って取り組む姿に成長を感じ、嬉しくなりました。

他のスタッフと話したり、子供達の姿を見る中で、モリウミアスで体験したことを一度の体験で終わらせず、出来る形で継続していくように計画し、支援していきたいと思うようになりました。その中でも、料理や基礎体力の向上に繋がる活動を継続して行えればと考えています。皆ですることを楽しさを感じ、繰り返す中で、一人一人の力となるような活動を取り入れていくように出来ればと願っています。

また、せっかく同じ場所で集ったことをきっかけに知り合えた長野や三重のメンバーとも情報交換をしながら、より良い取り組みを行えるよう工夫していくと活動内容も深まり、学びの継続となり、子供たちの成長にも良い効果をもたらせるのではないのでしょうか。



モリウミアスに参加して

学生リーダー 小原 和真

モリウミアスでの体験の特別なところは、子どもの自由が最大限に保障されていることにあります。放し飼いされた鶏を抱いたり、重たい斧を使って薪割りをしたり、火を起こしたりできる。大人は子どものやることに手出しはしないという、子どもの主体性の発揮を守るルールがある。

そうした自由と豊かな自然があるモリウミアスでの体験は、普段生きている自らの生活環境や価値観を相対化させてくれる特別な体験である。ぜひとも貴重な体験の中で子どもの学びを日常生活につなげられる働きかけができるようにしたい。学生リーダーとしても、モリウミアスのスタッフの方や、一緒に参加した他団体の方との関わりの中で得た私自身の学びを、普段の居場所づくりの活動の中に活かしていきたいと強く思う経験になった。

モリウミアスでの学び

学生リーダー 國本 寧々

モリウミアスに参加して印象的であったことのひとつは、スタッフの方の子どもたちとの関わり合い方である。モリウミアスでは小学生であっても子ども扱いせず、一人ひとりを尊重し、その意見や意思を大切にしていた。また、スタッフはあくまで子どもたち同士が話し合って決めることや最後までやりきることをサポートする立場として関わることで、子どもたちの発想を尊重し、成功体験へと導いていた。このような関わり合い方を、私はみんなの食堂での活動にも取り入れていきたいと考える。

子どもたちと一緒に考え、学び、成長していく姿勢を忘れないようにしたい。



03 令和5年度 滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業





滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業について

滋賀県「ヤングケアラー支援体制強化事業」の支援団体として、令和4年度より特定非営利活動法人芹川の河童で事業をお受けしています。

当団体は活動を通して、継続的な相談・支援ができる体制を整え、ヤングケアラー自身による自発的な相談を促すとともに、ヤングケアラーの周囲と地域による早期発見と支援につながることを目指します。

ヤングケアラー支援事業

昨年からヤングケアラー支援のお仕事をお受けしている。当初、私たちも手探りで始めたのでヤングケアラーがどのような状況なのか、支援とは何を求められているのかわからないままであった。

今年度は、内部でもヤングケアラー支援の必要性を深め、家族まるごと支援とそのための他機関との連携、ケアを離れるための第三の居場所の受け入れと宿泊実習、ヤングケアラーに出会うアウトリーチとしての校内居場所カフェに重点を置いて取り組んできた。このことで、繋がる子どもや若者も増えてきた。特に校内居場所カフェでは、必ず何人かがLINEで友達になり相談の連絡が来るようになった。

また、外部からのヤングケアラーのことを教えてほしいと連絡を受けることが多かった。居場所とヤングケアラー支援の関係での視察・ご相談。子どもの人権としての講演会。ヤングケアラー支援の講演会など様々なところに出かけてお話をさせていただく機会を得た。

ヤングケアラー支援の観点で考えるとどの分野にも関わってくることである。当法人が今年度より始めた障害児者計画相談事業所でも関わる人の中には「小さい時このような支援があったらよかったのに。苦労してきた」と話される若者世代の人などと出会い、これまで支援できていない実態を目の当たりにすることがある。また、障害児者の兄弟もヤングケアラーであることから支援できる環境の幅を広げないといけないこともわかってきた。

ようやくヤングケアラーのことを知ろうとしている人が増えてくる中、私たちに何ができるのか具体的に地域の人々と考え実践する体制がモデル的に作れることを目指していく。

(文責：川崎敦子)



モリウミナスに参加して

立命館大学産業社会学部 斎藤 真緒

芹川の河童には「雑談」と「おいしさ」があふれている。みんなが「笑顔」になれる。「妖怪博士」という別名をもつ代表の川崎さんに、妖怪のことを聞くと、私の疑問の10倍の情報量で、いろんなことを教えてくれる。そして、いつも、おいしい食べ物の香りが充満している。

ヤングケアラー支援では、「早期発見」が重要だとよく言われる。そういわれると、つつい支援者・大人は前のめりになってしまいがちだ。しかし子供たちにとって、家族のためのお手伝いやお世話は、当たり前の日常である。それ以外の生活を知らない。自分のことをずっと後回しにしてきた子供たちにとって必要なことは、まず自分自身を真ん中にして、楽しんでもいいと思ってもらうことではないか。自分自身が楽しいと思える経験をしてはじめて、自分の人生も自分のことを真ん中において考えてもいいと思えるのだろう。つつい家族の顔をうかがい、相手のことを優先してしまう思考は、簡単には変わらない。同じ経験をした人たちとの食事、そしてお泊りキャンプなど。本当に必要な支援につながる「芽」を育てるための活動とふれあいが、芹川の河童にはあふれている。





令和5年度 ヤングケアラー支援実績

【子ども第三の居場所】

子ども第三の居場所への受け入れ人数
 幼児2名、小学生5名、中学生1名、高校生1名
 合計9名

子ども第三の居場所食事提供日数
 143日

弁当配布

フリースクールてだのふあ 2名分 9回
 合計18個

【相談業務】

相談受け入れ

・当事者 4名、支援者 3名
 ・オンライン相談 LINE アカウント登録 15名
 LINE 相談人数 5名



LINE公式アカウント登録カードを配布し相談受け入れへ誘導した。

【イベント・行事など】

ヤングケアラーモルック大会（大津こどもソーシャルセンター合同）
 日 6月17日(土)
 場所 甲良町総合公園
 参加人数 当事者13名 学生参加2名 職員6名
 彦根モルック協会協力



琵琶湖でゆったり秋のキャンプ for 子ども・若者ケアラー 開催の様子

ヤングケアラーデイキャンプ（多賀町大滝の子どもの居場所合同）
 日 8月19日(土)
 場所 高取山ふれあい公園
 参加人数 当事者33名 大学生11名 職員6名

琵琶湖でゆったり秋のキャンプ for 子ども・若者ケアラー（YCARP 合同）
 日 10月21日(土)～ 10月22日(日)
 場所 国民休暇村近江八幡
 参加人数 当事者10名 大学生8人 職員7人



ヤングケアラー小学生合宿 ふゆキャン 開催の様子

ヤングケアラー小学生合宿 ふゆキャン
 日 1月4日(木) ～ 1月5日(金)
 場所 地域循環型未来食堂「みんなの食堂」・鳥羽や旅館
 参加人数 当事者7人 就労支援実習9名 大学生5名 職員5名
 ボランティア2名

ヤングケアラー夜の居場所 ユーズカフェ
 日 11月25日(土)
 場所 多文化共生支援センター
 参加人数 20人 大学生10名 職員5名 その他10名

【啓発活動】

チラシ配布 500枚
 カード配布 20000枚
 (高校配布 30校 19000枚)



校内居場所カフェ開催の様子



【講演活動（依頼受）】

ヤングケアラーについて 長浜人権政策課(川崎)
彦根ロータリークラブ(川崎)
彦根愛知犬上介護保険事業者協議会(斎藤・川崎)
近江八幡市要保護児童対策協議会(川崎)
滋賀県立大学 地域共生センター(川崎)
京都生活クラブ(川崎)
YCARP シンポジウム(川崎病欠のため資料提供)
日本質の心理学会(川崎)
彦根市社会福祉協議会 子ども送迎ボランティア(川崎)
2023児童虐待防止学会滋賀県大会プレゴングレス(川崎)
滋賀県社会福祉協議会 重層的支援体制整備事業勉強会(川崎)
大阪生活クラブ(川崎)
高島市社会福祉協議会(川崎)

子どもの人権(川崎) 彦根市人権連続講座 小泉町 城西学区 高宮中北町
南三ツ屋町 元岡町 正法寺 池洲町 平田町

視察・見学受け入れ 彦根市市議会議員5名
近江八幡市教育委員会
高島市役所・高島市社会福祉協議会
京都 YWCA
京都生活クラブ
大阪生活クラブ
彦根東高校
鳥居本養護学校
彦根東中学校



【講演会】

ピアサポーター養成講座	7月1日(土)	斎藤	COZY TOWN	25名
	11月11日(土)	斎藤	彦根勤労福祉会館	20名
	12月2日(土)	斎藤	彦根勤労福祉会館	15名
ヤングケアラー講演会	12月6日(土)	斎藤・川崎	近江八幡市ひまわり館	30名
ヤングケアラー支援報告展示	8月7日(月)～	8月10日(木)	彦根市役所ロビー	
	12月4日(月)～	12月8日(金)	近江八幡市ひまわり館	

その他
ブース参加 インクルーシブ食堂 12月23日(土) 日野町わたむきホール





外部からの声



ピアスタッフのいる居場所

子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト（YCARP）発起人
河西優

今年度は芹川の河童さんと私の関わる YCARP との共催で子ども・若者ケアラー向けキャンプ事業、夜の居場所事業（ユースカフェよるやすみ）を行った。芹川の河童さんの強みは、学生ピアスタッフとケアラー当事者との信頼関係である。芹川の河童さんから参加してくれた当事者の方に対し、初めての場への参加に緊張や不安がないか、どのような距離感で関わればいいのか、他団体のスタッフとして悩むこともあったが、日頃から当事者の方と関係を築いているピアスタッフの方がいてくれることに安心感があった。

ケアラーにとっては、今すぐに状況を変えられなくとも、余暇や居場所を通じてケアから離れること、ピアスタッフというナナメの関係も含めた家族以外の関わりを通じて多様な生き方や選択肢を知る機会が必要だと感じている。

ヤングケアラー支援の現状

社会福祉法人彦根市社会福祉協議会
地域支援課長 森 恵生

テレビCMなどで「ヤングケアラー」という言葉が使われるようになり、世間でも少しずつ理解や関心は高まりつつある。普段の暮らしの中で「もしかしてあの子も…」と気づくことがあるかもしれない。

こうした理解や関心の高まりは素晴らしいが、一方で、その世帯や子どもを支援するための制度やしきみが整っているかという点、多くの自治体では何も支援の手立てがなく、相談窓口が決まっていればよいほうである。

そんな中、彦根市には「ヤングケアラー支援」のモデルとなる場があり、まだまだ支援の在り方が手探りな状況にも関わらず真剣に向き合う大人たちが居る。この現状を私たちは決して当たり前と思うことなく、ヤングケアラー支援をカタチにしていけるために、それぞれに何ができるかを考えていくことが必要なのだと思う。

子どもに寄り添う支援を

彦根市子ども未来部子育て支援課
課長補佐 北川 一

彦根市では、市内でのヤングケアラーの実態を把握するため、令和4年に「小・中学生の生活についてのアンケート調査」を行い、令和5年3月にその結果を取りまとめ、本市にも一定数のヤングケアラーがいることが確認できた。さらに、ヤングケアラーと思われる子どもたちはお世話そのものの支援よりも、「自分の話を聞いてほしい」、「自由に使える時間ほしい」、「勉強を教えてほしい」といった寄り添う支援を周囲の大人に求めていることも分かった。

これらの支援内容は、正に特定非営利活動法人芹川の河童様が「子ども第三の居場所」、「ヤングケアラー支援」で実施されている事業内容に合致しているものと考えている。今後も、子どもの気持ちに寄り添った支援の継続と、行政との良好なパートナーシップを深めていただくことを期待する。



「誰にも会いたくない」カフェ

その気持ち、分かち合いませんか？

理由ははっきりしなくても、毎日の生活に生きづらさを感じていませんか？
「誰にも会いたくないカフェ」はそんな悩みを抱えた若者たちの集まりです。

お茶を飲みながらおしゃべりをしたり、
ゲームをしたり、ただぼーっと過ごしてみたり・・・
一人で過ごすのも OK、みんなと過ごすのも OK な場所です。

仲間と出会うなかで、一緒にこれからのことを考えてみませんか？



令和5年度 誰にも会いたくないカフェ 活動実績

通信サロンは毎週火曜日・木曜日の12時から16時までの4時間開所。2023年度4月から1月までにのべ約400人の若者がサロンに来所した。見学者も延べ77人。見学者のうち2人が新たに登録し、現在常時来所者は12名。男女比はほぼ半々となった。何をしてもいい、何もしなくてもいいというサロンのコンセプト通りに、若者はゲームをしたり、一人で過ごしたり、趣味の話をしたりと様々な過ごし方をしている。

毎年、若者たちの楽しみ方は変化しているが、今年度は麻雀が大人気となった。TRPGをする若者がいないことも今年の大きな変化だろう。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
参加者数	44	47	50	43	40	49	59	48	52	39
見学者数	14	7	9	8	7	10	4	3	10	5

合計	開所日数
参加者数471人	84日（大雪のため1日閉館）
見学者数77人	

誰にも会いたくないカフェは誰かに会いたいカフェ！？

主任 米田 紀代子

こんな場所があるなんて知らなかったと言ってくれたAさん。早く知りたかったと言ってくれたBさん。4時すぎてももう少しここにいてもいいですか？と尋ねるCさん。ペットボトルの処理をしていたら、そばにじっと立ってるDさん、どうしたの？と尋ねるとボソッとありがとうございますと。

ここに書いたのはほんの一例ですが、今年度もたくさんの暖かい言葉が溢れた一年となった。誰にも会いたくないカフェ通信サロンはここにすれば誰かに会えるカフェ居場所。スタッフは若者に必ず一言以上の声をかけ、和室にいても目を、心を配るようにしている。若者一人ひとりの思いをすべて理解することは難しいが、またサロンに行ってみようと思ってもらえるような心地よい空間・時間作りをしていきたいと思っている。



若者支援の今後

滋賀県立大学 准教授 原 未来

2023年度は、4月のこども家庭庁発足、こども基本法施行を皮切りに、こども・若者政策の転換期といえる年となった。こども・若者が権利主体として明確に位置づけられたのは初めてであり、歴史的に見てもその意義は大きい。

一方で、一連の動きは「こども」という言葉に象徴されるように、乳幼児期～学齢期程度の者に焦点化され、若者は置き去りにされている。かねてから他国におくれを取ってきた日本の若者政策が再び後景化していかないよう、協同で声を上げていく必要性を強く感じている。芹川の河童が行ってきた若者に寄り添い、居場所をつくりながら、居場所の外の社会とも架橋していく実践の意義を、より広く発信し共感を広げていく動きを期待したい。

相互作用

支援スタッフ 田中 紀行

昨年から変わったことは、新しく女性の利用者が数人増えた事だ。昨年までは男性の利用者が多かったが、女性の利用が増えて会話のトーンやサロンの雰囲気にも暖色が加わった様に思える。

その中で度々感じるのが、利用者の誰かがたまたま休んでいたりと、その人の存在がポツカリと空いてしまい、その人の代わりがないということに皆が気にかかる様子が、それぞれ自分の口で言葉を発してくれるようになった事だ。

人間、意外と社交辞令のような「気遣い」はできても、心からの「気遣い」は中々出来ない。そして、誰も気付かなかったような少しの事でも、「大丈夫？」と利用者間で声かけができるのは、去年までは見られなかった助け合いが週二日という限られた時間の中で少しずつ構築されている証拠でもあるし、各利用者の優しさが心の扉を開けてくれる手助けをしてくれているのだとすると、一年の経過でとても素敵な相互作用だ。

もちろんそれは各々が自分の体調や精神面の調子と向き合い、バランスをとっておこなっていることで、地道な一歩ではあるものの、「気付き合う気遣い」「助け合う心」は支援スタッフとしても寄り添いながら見守っていければと思っている。

働き出した、若者の声

アルバイトを始めて

通信サロン 井上

私は引きこもり状態が続く事も良くないと思い、ボランティアや通信サロンへ通うなど外向きに活動をしていたのですが、次の段階としてアルバイトに取り組みました。始めた頃は精神的な問題もあり、気疲れしていましたが、開始時よりも回復しているので、楽に取り組んでいます。仕事の内容的には、始めた頃は仕事を覚えたりコツを掴む迄は時間的にも気持ち的にも余裕が無くて大変だったのですが、徐々に覚えてコツを掴み、今では頭で整理しながら効率よく動けるようになりました。

最後に私にとってアルバイトは、自立して行く最初のはずみと考えています。仕事をこなして行けると言う自信にもつながっています。



利用する、若者たちの声

通信サロンを利用して

細江 美希

通信サロンは、しなければいけないことを決められていないからプレッシャーを感じず安心して過ごすことができる場所である。

そして様々な経験ができる場所でもある。講演会のお手伝いやお祭りなどへの出店で地域の方たちと話したりすることで社会との繋がりを感じることができた。

特に鳥居本まつりでのポップコーン屋は楽しいことがたくさんあった。本格的な機械を使っでのポップコーン作りや、初めての接客で緊張したけどお客さんに「ありがとう」と言ってもらえたのがとても嬉しかった。

知らなかったことを知れたり、いろんな人たちと出会う中で自分の世界が少しずつ広がっていていると感じる。

私にとっての通信サロン

岩噌 みゆき

「誰にも会いたくないカフェ (通信サロン)」には去年の春頃、友人に誘われて通い始めた。最初はどんな場所か全く想像できず「1日事にプログラムでも組んであるんじゃないだろうか…?」と、不安だった。

実際に友人と共に訪れてみるとそんな事は無く、行ける時に行き、好きに時間を過ごせるととても落ち着いた場所だった。

また所属する皆さんも様々な事情を抱えていらっしゃるため、こちらに対して「無闇に質問したり事情を聞いてきたりしない」…それが私にとってはとてもありがたく嬉しいことだった。

正式に所属したあとは、受付やお祭りの手伝いにも参加させてもらい本当に得難い経験をさせてもらっている。

私にとっての「通信サロン」は「家以外で、呼吸がしやすい場所」である。

学童で働く、若者たちの声

なかま〜ず篠原

なかま〜ず篠原 主任 榎 千奈津

私は放課後児童クラブ「なかま〜ず篠原」の主任を務めている。放課後児童クラブ、家とも学校とも異なる空間で子どもたちが過ごしているそこでは、子どもたちの様々な姿が見られる。

自ら進んで勉強を頑張る姿、友達と遊びに夢中になる姿、疲れて休んでいる姿などが見られる。職員として子どもたちの姿を見守りながらも、子どもたちに指導する日を送っている。

放課後児童クラブが過ごしやすいにするには、子どもたちはもちろん、そこで働く職員たちも重要だと思う。主任として、職員一人一人が何を考えているか、気になることはないか、声をかけて話を聞くことを心掛けている。

一人ではできない、周りの協力で成り立っていることを常に心に留めて、これからも放課後児童クラブを心地のよい空間にしていきたい。

主任として

なかま〜ず安土 主任 井上 恵太

学童で働き始めて3年目、コロナが落ち着いてきたことで、学童でも活動等の規制が緩やかになり、子どもたちのより元気な姿を見ることができたことは、コロナ禍の学童しか知らない私にとって新鮮であった。

主任として2年目になる今年度は、子どもたちの居場所づくりとしてハード面で環境を整えることや、職員が働きやすいと感じる職場づくりを意識する1年であった。昨年の秋、以前私もお世話になっていたところから、就労支援で働きに来ている人がいる。

私が受け入れる側になって思うことは、以前の私がそうしてもらったように、優しく受け入れ、しっかり支えていく、その人にとって安心して働ける場所になるよう努めていきたいということである。

多賀の学童保育に触れて

多賀町放課後児童クラブ 支援員 西岡 佳見

多賀の放課後児童クラブに勤めて子どもたちと接することで、自分が成長したと思う点がいくつかある。

大きな一つは、話し方である。子どもの注意や関心は逸れやすく、問題が起こっても、話を聞くことや自分の考えを伝えることも難しいことがある。そのような場合は、多くの工夫が必要となる。話にかける時間はできるだけ短くし、子ども自身の考え方を引き出す言葉かけを行い、本人がその問題へ意識を集中できる状況を作る。

100%上手くいくことはまずない。しかし、子どもの成長の足掛かりとなれたと感じることもあり、日々の研鑽は自分の成長と、自分への信頼を取り戻す要素となっている。また、子どもへの支援に集中できるのも、職場の皆さんへの信頼や助力が力となっている。



若者の就労体験や就労を支えるための居場所ナイトケアサロン 「誰にも会いたくない夜」

特定非営利活動法人 芹川の河童 園山 美恵

当団体には、慣れたところでの就労体験や就労を実践した若者の支援として、居場所ナイトケアサロンである「誰にも会いたくない夜」がある。

開催日：毎月第3火曜日

開催時間：16時～20時

開催場所：みんなの食堂

参加人数：10人程度

ここでは、若者と支援者が一緒に料理を作り、好きなだけ食べる。そして、ボードゲームをする人たちもいれば、お酒やジュースを飲みながら、おしゃべりをしている人たちもいる。

このような楽しい時間を共有することで「よし、明日も頑張ろう」という元気を充填する。

『何をしてもいい、何をしなくてもいい』場所を目指している。

今年度は4年目を迎えたのだが、夏を迎えた頃から、開催が不定期になり、現在休会中である。その理由は次のとおりだ。

① 企画運営を職員から若者に変更

毎月の開催に向けて声掛けや計画、買い出し準備等を担当職員がしていたが、担当職員の退職を機に、若者に少しずつ任せてみることにした。しかし、月に一回しか会わないメンバーなので、準備等の分担など難しかった。SNS等を使って、もっとうまくできたのではと思われる。

② 参加者の気持ちの変化

コンセプトに沿って参加者も参加の仕方もこれといったルールがないことで、のんびりとした誰でも受け入れられる場になっていたと思う。が、参加者が固定されてくるとともに、参加者の就労や生活の変化に伴って、参加者の気持ちも変化し、欠席する人が固定化されてきた。

③ 他団体で同様の活動が始まる

そこで、一度休止にして、誰にも会いたくない夜の持ち方を再考することとなる。休止中は、同じ職場の若者の「誰にも会いたくない夜」の日や、他団体の活動に希望者を募って参加することもあった。そのときは、参加者も増え、大好評だった。

それらを踏まえて、これからの「誰も会いたくない夜」の持ち方については

- 参加者の対象を絞った日を作る。

例えば、同じ仕事若者が集まる日、ボードゲームを楽しむ日など。

- 開始時間を就労時間に合わせ遅めにする。

それでも変わらない、変えたくないテーマはある。

「美味しいものをただただ食べて、楽しい時間を共有する。」

これが、若者の明日を頑張る力に繋がると信じている。

令和5年度 相談実績

(令和6年2月現在)

4/25(火)	5/23(火)	6/13(火)	9/5(火)	10/19(木)	11/28(火)	12/21(木)	1/30(火)	2/27(火)
6人	6人	5人	6人	5人	6人	5人	7人	6人

* 8月は、相談者が長時間勤務になるため、相談日は設けない。

当法人では、毎月、外部の相談員（(株) アットスクール代表取締役 鈴木正樹氏）による、1時間枠の相談日を設けている。相談者は、当法人に就労する若者や誰にも会いたくないカフェを利用する若者を中心だ。また、保護者、地域の方も実費で相談ができる。

若者は働きながら、様々な悩みや不安を持つ。もちろん当法人での職場でも、その気持ちを受け止め対応している。ただ、職場の中では、互いに支え合う仲間であるため、みんなの迷惑になるのではと隠す若者もいる。そこで気兼ねなく話せるよう、外部の相談員の方をお願いしている。

相談内容は、勤務内容から体調、家庭の事情等様々である。専門家である相談員に安心して吐き出すとともに、相談員から適切なアドバイスや提案、そして力強い応援をもらい、素の自分を認めてもらえることが、「また1ヶ月がんばろう」という活力に繋がっている。

今年度で4年を迎える相談事業で、毎月相談を受けて、実践をしてきた若者の成長が著しい。各地の放課後児童クラブで主任を務める人もいれば、新しい放課後児童クラブに異動をして、子どもたちと真摯に向き合っており、自らの成長を実感する人もいる。こうした毎月の積み重ねを大切に、これからもこの相談事業を継続していきたい。

特定非営利活動法人 芹川の河童 園山 美恵

若者の就労を支える為の相談支援

アットスクール 代表取締役
京都女子大学 非常勤講師 鈴木 正樹

NPO 法人芹川の河童では、不登校やひきこもりなど毎日の生活に生きづらさを感じている若者たちの居場所として「誰にも会いたくないカフェ（通信サロン）」やナイトケアサロンとして「誰にも会いたくない夜」（みんなの食堂）を開設している。

悩みを抱えた若者同士が、ゲームをしたり、ただぼーっと過ごしてみたりなど、自宅から出てカフェに来ることで、まずはありのままの自分に向き合い、そして人とのコミュニケーションに慣れていく中でこれからのことを考える場となっています。

利用している若者に聞いてみると、「このカフェは、何人かが来ていても積極的に会話する必要もなく、程度にほっといてくれることが心地よい」という。

青年たちの生きづらさや悩みの原因や背景は多様であり、これまでに不登校を経験したり、就職先でもうまく適応できずに離職を繰り返したり、その結果自信を失い自己否定や精神疾患に至るなどの青年も多くいます。

相談支援は月に1回、個別に時間を設定し、一人ひとりの悩みごとや困りごとを伺い、解決に向けた助言を行っています。

相談員として私が心掛けていることは、ひきこもりや未就労であっても、まず現状を肯定して「1年後の自分はどんなになりたいか!？」ということを聞くようにしています。

青年のほとんどが「1年後は収入を得ていたい」、「週1日でも働きたい」など現状を変えたいと思っていますが、働くためには何が必要かについて理解できていないことがほとんどです。

本人と話をしながら、まずは「朝、自分で起きることから始めてみよう」や「近くのコンビニに買い物に行くことから始めてみよう」など、一人ひとりの状況に合わせて、目標を設定して、それを達成することで自己肯定感を向上するよう努めています。

これまでも、家から出られなかったケースや職場での人間関係に悩み精神疾患を患っていたケースもありましたが、半年後、一年後のありたい姿を具体的にイメージすることで生活リズムが改善し、外出や再就職ができるようになっています。



障害児者計画相談支援事業 子ども応援ステーション「なかま〜ず」

以前より当法人の課題となっていた、障害児者計画相談事業所を今年度立ち上げることができた。子ども応援ステーション「なかま〜ず」という名称ある。

障害児者の計画相談とはいえ当法人の特徴である引きこもり、ヤングケアラー、社会的養護などの相談の傾向が多い。ヤングケアラーでは、「小さい時このような支援があったらよかった」と話される方や一人で生活するために相談に乗ってほしいと言われる長期間家におられた方などいらっしゃる。そういった意味では、繋がる・直接支援を考えられる取り組みの一つとして相談事業の位置づけを考えることが必要であると考えている。

今後も、当法人の特徴を生かした相談事業ができたらと考えている。

(文責：川崎敦子)

令和5年度 相談実績

幼児	2名
小学生	2名
成人	3名

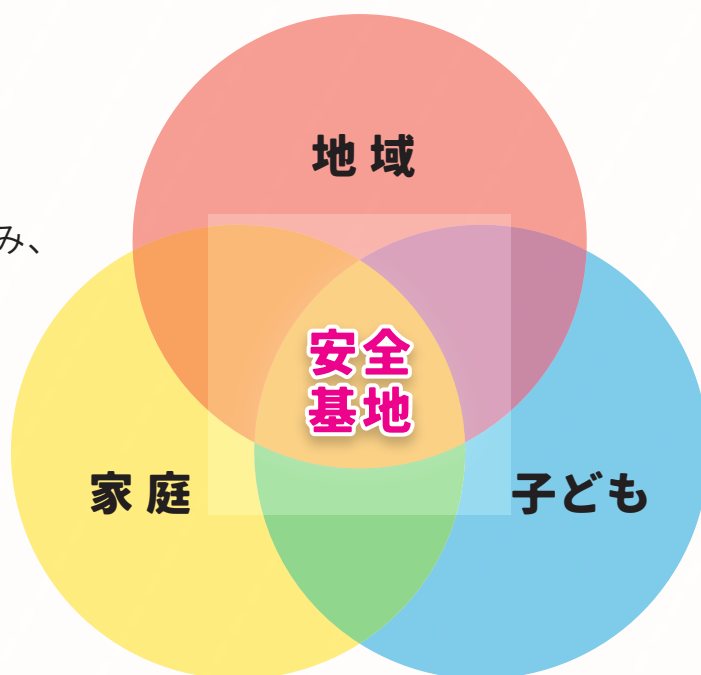
当法人の事業は、高齢者福祉や障害者福祉といったいわゆる対象人数も多く福祉の支援体制がしっかりしている分野ではない、対象人数も少なく支援体制がまだ整備されていない分野の支援をしている。このような分野は、近年社会問題としても取り上げられて、重層的支援など対策を考えられるようになり注目も受けている。しかし、支援対象者が少ないことから制度化されても安定した運営は難しいので助成金などに運営を頼ることになる。一方で、何でも引き受けられる居場所の運営は需要も多く、視察・見学の申し込みは年々増えている。このことから、当法人の居場所事業は、①補助金に頼らない安定運営、②行政の課題に対応できる柔軟性の二つを課題として取り組み、先進的なモデル取り組みが求められていると感じている。

これまで地道に地域の支援をコツコツとしてきた当法人ではあるが、多方面と手を組みながら培ってきたこれまでのノウハウを生かした形で広く広げていくことが必要であるとする。また、志を同じくする団体と手を組みながらネットワークの形成をしていきたいと思う。

ここで忘れてはいけないのは、当法人の理念であるすべての関わる人が幸せになることを念頭に、当事者の声を真ん中に事業を進め行くことである。様々な時代の流れに対応しながら、しかし理念はぶれない姿勢こそが当法人にふさわしいと切に心に刻みながら。

特定非営利活動法人芹川の河童 経営理念

一人ひとりの存在を認め、
寄り添うことで、地域を愛する人を育み、
自らも成長し、幸せな地域を創る
私たちは「安全基地」であることを
宣言します



■ ヤングケアラーオンライン告知カード

特定非営利活動法人 芹川の河童

ヤングケアラーオンライン相談室

LINE公式アカウント



LINE公式アカウント
お友だち登録してね!

URLでのアクセス <https://lin.ee/goZtbtQ>

24時間
LINE相談受付中!

聞いて欲しいことや言いたいこと、
なんでも聞かす! 気軽に話してね!

ヤングケアラー
相談室

大人に代わって、こんなことをしてませんか?

家事

幼いきょうだいの世話

家計のためのアルバイト

家事や家族の世話を日常的に行う子どもを「ヤングケアラー」と言います。
悩みや困りごと、話したいことがあればなんでも話してくださいね。

運営団体: 特定非営利活動法人 芹川の河童

TEL: 0749-20-9084

MAIL: kappa.minsyoku@gmail.com

■ 子ども第三の居場所告知カード

子ども第三の居場所LINE公式アカウント

お友だち募集中!



LINE公式アカウントでは、
体験プログラムの内容や最新情報を
配信しています!

うらもチェック▶

家でも学校でもない、みんなが安心して過ごせる居場所
「子ども第三の居場所」が花しょうぶ通りにできました!

開設日 毎週 月・水・土 15時～19時

- 子どもだけの立ち寄りOK
- 親子での参加もできます

佐和山小学校から徒歩3分
城東小学校から徒歩10分

〒522-0083 彦根市河原1丁目2-7

当日 月・水・土15時～17時まで
参加可能 随時見学受付中!

TEL: 0749-20-9084

※見学者が計り直し通ります

■ ヤングケアラーピアサポーター講座

令和5年滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業 特定非営利活動法人 芹川の河童

地域で支えよう、子どもが子どもらしく生きる社会/
ヤングケアラーピアサポーター養成講座

受講者募集!

ピアサポーター養成講座を受けて、
ヤングケアラーに寄り添いませんか?

ヤングケアラーが参加するオンラインサロンや、ヤングケアラーの多様な
悩みに対し、SNS、電話などで相談支援(ピアサポート)を実施するなど、
寄り添い支援を行います。

2023年 7月1日(土) 10:00～12:00
2023年 12月2日(土) 10:00～12:00

COZY TOWN 滋賀県彦根市大東町2-28
アルプラザ彦根4F

2023年 11月11日(土) 10:00～12:00
実践編
・ブラッシュアップ
・ネットワーク構築のための講座

彦根勤労福祉会館 2階研修室
滋賀県彦根市大東町4-28

★受講者には受講証を差し上げます。入門編を受講すると11月開催の実践編にお申し込みできます。

参加対象 高校生・大学生(全学年)、行政機関、民生委員
ヤングケアラー支援に興味がある人

受講料 無料

定員数 先着30名 ※定員に達したら受付を終了いたします

申し込み方法 お電話またはメールにて受付いたします。

お電話: 0749-20-9084
(法人責任者 川崎までお問い合わせください)

メール: yancare@gmail.com

講師 立命館大学産業社会学部 教授 斎藤 真緒氏

(公財) 京都府ユースサービス協会の「子ども・若者ケアラー事務局」事業(2021年3月～2023年2月)の発起人、「子ども・若者ケアラー」の声を届けるようプロジェクト「YCARP: Young Carers Action Research Project」(2021年6月～)発起人、「ケアラー支援条例をつくらう」ネットワーク京都(略称: 京都ケアラーネット)、共同代表。

講演会に関するお問い合わせ
特定非営利活動法人 芹川の河童
TEL: 0749-20-9084 (法人責任者 川崎までお問い合わせください)
MAIL: info@minna5.com

■ ヤングケアラー講演会チラシ

令和5年滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業 特定非営利活動法人 芹川の河童

特別講演会

ヤングケアラーの子どもたちが
自分らしく過ごせる地域へ
地域でできることを一緒に考えよう

「ヤングケアラー」とは、本来大人が担うと想定されている家事や
家族のケアなどを日常的に行う18歳未満の子どものこと。
本人にとって大きな負担となっても、行政や福祉・地域の人々
に相談することができます。困難を抱え込めず生き生きと暮らすに
ています。

当講演会では2名の講師をお招きし、ヤングケアラーへの理
解を深め、どのようなサポートが必要なのかを学びます。
子どもたちが自分らしく過ごせる地域にするために、地域に住
む私たちができることを一緒に考えてみませんか?

2023年 12月6日(水) 10:00～12:00
参加無料

開催場所 近江八幡市総合福祉センター
ひまわり館1階 近江八幡市土田町1313

参加対象 行政機関/ヤングケアラー支援者・支援団体
これから支援活動しようと考えている方

定員数 先着100名 ※定員に達したら受付を終了いたします

申し込み方法 お電話または専用フォームより受付いたします。

お電話でのお申し込み: 080-4012-7738
(法人責任者 川崎までお問い合わせください)

専用フォームからの申し込みはこちら
<https://forms.gle/jrXHNbCpHC9sn3h9>

講師プロフィール
立命館大学産業社会学部教授
斎藤 真緒氏

専門は家族社会学、高齢期保健福祉。
2018年9月～2019年9月までシェフィールド大学 The Centre of
International Research on Care, Labour and Equalities 客員研究
員、「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」運営委員。
(公財) 京都府ユースサービス協会の「子ども・若者ケアラー事務局」
事業(2017年3月～2023年2月)の発起人、「子ども・若者ケア
ラー」の声を届けるようプロジェクト「YCARP: Young Carers Action
Research Project」(2021年6月～)発起人、「ケアラー支援条例を
つくらう」ネットワーク京都(略称: 京都ケアラーネット)、共同代表。

特定非営利活動法人 芹川の河童 代表
ヤングケアラー担当 川崎 敦子氏

滋賀県「ヤングケアラー支援体制強化事業」の支援団体として、地域の
誰もが安心して暮らせる居場所をつくるために、若者支援、居場所づくり、
子ども支援、ヤングケアラー支援など様々な事業を行う。

講演会に関するお問い合わせ
主催: 特定非営利活動法人 芹川の河童
共催: 近江八幡市
TEL: 080-4012-7738 (法人責任者 川崎までお問い合わせください)
MAIL: info@minna5.com

令和5年度
特定非営利活動法人 芹川の河童
日本財団・こども第三の居場所
滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業ヤングケアラー支援事業
活動実績報告書

令和5年3月発行

特定非営利活動法人 芹川の河童
〒522-0083 滋賀県彦根市河原2丁目3番4号
TEL 0749-20-1322

私たちは
安全基地♥

